

なるほど 3

(第三編) 何がおかしいのだろうか

照 伝光



前書

第三十五章	強化された本人確認	13
第三十六章	揺れる家	13
第三十七章	税理士を雇わずにキッチンと税金を方法	25
第三十八章	半透過ミラー	53
第三十九章	脱出	67
第四十章	腹を割る	89
第四十一章	エネルギーウエーブ	101
第四十二章	春は来ないが夏も冬もなく、秋しかない国	119
第四十三章	有識者委員会	137
第四十四章	戦争大河ドラマ	151
第四十五章	インフレ	159
第四十六章	目覚めた公務員	167
後書		193



# 前書

## 前書

この小説(なるほどシリーズ)は、不思議なテレビを通じてこの世の中の理不尽な出来事に、なるほど(あるいは「なるほど」と頷けるか)と言うテーマで書き始めたものでした。「なんだこれは」「おかしい」と日々の出来事に疑問を呈してホームページで連載しましたが、テーマがテーマだけに時の経過と共に内容が色あせるスピードが速く改訂は極めて困難です。

ところが最近新型コロナウイルスの感染拡大で社会はいわゆるパニックに陥りました。私も外出を控え暇に任せてこの「なるほどシリーズ」を読み直してみると、外面は違っても意外と同じような事が起こるのだなあと感じました。

このウイルス事件での政府の対応は超スローペースの後手後手で情けなく思うことが多々ありました。一方、ほとんどの国民の対応は素晴らしいものでしたが、「関係ない」と言つて他府県に観光旅行に出かけたり朝一番からパチンコ屋に並んだり夜遅くまでワイワイと酒を飲む人もいました。

最終的には個人の判断と言うことになるのですが、相手がウイルスだけに、つまり結束して増殖するウイルスに対して、一部の無責任な人々の行動は人類全体から見てもあまりにも無謀なものと言わざるを得ません。

## 前書

このような事態では、各国の最高責任者は全国民をまとめ上げて全人類のために最善の方法を模索し迅速に対処しなければなりません。最高責任者のまさしく力量が問われるのです。

もちろん、自らの地位を守るためではありません。しかし、あまりにも通信技術が発達したために一部の最高責任者は国民を誘導あるいは統率しようとしています。つまり為政者にとって都合のいい和を作ろうとするのです。和というものは個々人がお互いを認めた上で相互依存関係を作ることです。そうしなければある一族だけで子孫を残すことができません。他の生物もそうです。血が濃くなればその種は滅亡します。

一方、ウイルスは血を持たないので相互依存関係は不要で寄生して種を増やします。しかも人類の祖先、大先輩です。その継続生存年数、つまり歴史は人類のそれを凌駕します。ようやく人類はウイルスとの共存の必要性に気付きましたが、その共存のルールをかたくなに守ってきたのは、これまたウイルスなのです。

さて再び馬鹿げた話が繰り返されますが、ウイルス感染のようなパニックはいくらでもあります。人類はウイルスだけでなく地球そのものを大事にする必要があります。

どうです？ なるほど！ と思われませんか？

第三十五章

強化された本人確認

「田中さん！」

乱暴にドアを開けて大家が靴も脱がずに飛びこんでくる。

「銀行とは付き合いたくない！」

コーヒーを飲みかけていた田中がキョトンとして大家を見つめるが、すぐカップをテーブルに置いて含んでいたコーヒーを飲み込むと口を開く。

「幾ら何でも靴ぐらいは脱いでください」

「あっ！」

慌てて大家が靴を脱ぐ。

「どうしたんですか」

「もう銀行にはお金を預けることができません！」

「そんな。お金を預かるのが銀行の仕事でしょ？」

「引出や振込はもちろんのこと、法律が変わって預けるときにも本人確認が必要になった」

「それはないでしょ。お金を預けるのに不都合なんてあるはずがない」

「わしもそう思って銀行員に咬みついた」

「筋の通った説明がありましたか？」

\*

ここは銀行のロビー。大家が窓口で怒りまくっている。



「出金や振込の手続きが厳しくなるのは分かるし、我慢もする。なぜ預ける金までうるさく言うのだ！」

「失礼を承知で申し上げますが、盗んだり騙したりして手に入れたお金かも知れないからです」「なんだと！ 銀行は預金者を盗人だと言うのか！」

「ですから失礼を承知で申し上げます。本日、つまり四月一日から法律で本人確認の取り扱いが変更されたのです」

「はーん。分かった。エイプリルフルだな。分かった、分かった。それにしても質たちの悪い冗談だな」

大家がニヤツと笑う。

「冗談ではありません。この現金はどうされたのですか」

「月末に集金した家賃だ。やましい金ではない！」

「それにこの振込はどういう取引なんですか」

「ここは税務署か！ 振込先は工務店で雨漏りの修理代だ！」

「と言うことは修理の契約書があるのですね。それを見せていただけますか」

「もう、我慢ならん。税務署長を！ いや、間違った。支店長を出せ」

「それでしたら、そのボタンを押して番号札をお取りください」

「なに？」

「現在百人待ちです」

「えー！」

「大家さんと同じようにお怒りのお客様が支店長に直訴したいとお待ちなのです。なにとぞお静かに順番をお待ちください。一応この現金と振込票はお返しします」

\*

大家が工務店の社長に現金を手渡す。意外にも社長は手際よく領収書を作成すると深々と大家に頭を下げて応接セットのソファを勧める。

「本来なら私の方から集金にお伺いしなければならぬのに、わざわざお越しいただきましてありがとうございます。これからは私の方から集金に参りますので」

領収書を手渡すと社長も座る。そしてフーツとため息を漏らす。

「妙な世の中になりましたね」

「？」

「大家さん。銀行で振込することに嫌気がさしたんでしょ」

「まだ振込は我慢する。しかし、振り込む前に現金を預けなければならぬ。今度は預ける金のことをとやかく言われる。いったいどうなっているんだ」

「諸悪の根源は振り込み詐欺です。いったん件数は減りましたが、去年あたりから再び被害が拡大しているようです」

「それは知っている。振り込め詐欺のニュースが流れない日はない」

「困ったことです」

「しかし、窓口で散々質問されたあげく契約書を持って来いなんてやり過ぎだ」

「まだ、マシな方です」

「と言うと？」

社長の冷静な言葉に大家が落ち着きを取り戻す。

「大家さんは個人事業者ですから、まだいい方です」

事務員がお茶を大家の前に置く。銀行の対応と大きな違いに大家は社長に尊敬の念を抱く。

思えばいつも性急に保守や修理を依頼してきたが社長は文句ひとつ言わず大家の意向を汲んで誠実にこなしてくれた。

「私どもは法人ですから、登記簿謄本を出せとか、手続きが大変なのです。社長である私がいちいち銀行に行って入出金する暇がありません」

「当然社員に行かせるんですよ」

「そうです。そうすると『本当にこの会社の社員か』と色々な書類の提出を求められます。法律が変わるからとあれこれと対策しましたが、とても手に負えるものではありません」

「これからどうするのですか」

「昔のように集金して現金で支払うことにしました」

「そうすると頑丈な金庫がいるな」

「すでに発注しました。もちろん代金は現金で支払います」

大家は視線を社長から天井に移すとポツンと言葉を吐く。

「信頼、信用が瓦礫の音をたてて崩れ出した」

\*

「振込が十万以上なら、相手は？ 何のために？ それを証明する書類は？ こんな感じだ」

「貧乏人にはない苦勞ですね。しかし、何かおかしいな」

「諸悪の根源は振り込め詐欺じゃ」

「でも最近、振り込ませるんじゃないやなくて、集金に行くそうです」

ここでテレビの電源が入ると逆田さかたが現れる。

「そうです」

画面が変わる。公園のベンチで若い男がスマホに耳をつけている。

「俺、交通事故起こしてしまって相手は二百万円くれれば許すと言っている。今、俺、動けな

いから友達に取りに行かせるよ。それまでなんとか二百万円用意して欲しいんだ。お願い！

お婆ちゃん！ 助けて」

今度は居間で受話器を持ったお婆ちゃんの画面が変わる。

「ケガはないかい？」

「俺は大丈夫」

「よかった。よかった」

「お婆ちゃん。すぐ用意できるかな」

「あいよ。最近、銀行でお金を下ろすのに、保険証を持つとるか、何に使うのか、とにかくうるさくてね。それに振り込め詐欺が多いだろ」

「お婆ちゃん！ 振り込め詐欺には気をつけてよ。騙されないように用心した方がいい」

「わざわざ銀行まで行って振り込むのが面倒だから、振り込め詐欺には引つかからない」

「さすがお婆ちゃん。よく考えたなあ」

「現金が一番。それにいつ銀行が潰れるかも。どこかの国みたいに金が出せなくなるかもしれんし、第一足が不自由で……」

「そうだ。いい病院を知っている。この件が落ち着いたらその病院に連れて行ってあげるよ」

「そうかい。お前は本当にやさしい子だな。それによく気が付く」

「それでお金の方は？ お婆ちゃん」

「お金は手元に置いている」

「お婆ちゃん。余り長話できないんだ。今から友達が行くから頼むよ」

「いくらだったけ」

「五百万円」

「五百万円だね。用意しておくよ」

\*

画面が変わる。あのお婆ちゃんの自宅の玄関に若い男が立っている。

「黒田と申します。お金を預かるように言われてきました」

「いつも孫がお世話になってます」

お婆ちゃんは頭を深々と下げると紙袋を差し出す。

「いいえ。こちらこそ。ところで話が変わって示談金が一千万円になりました。用意できますか。時間がないのです」

お婆ちゃんは差し出した紙袋を引き戻す。

「一千万！」

「そうです。相手が足元を見て。でもこれ以上はダメだと念を押しました」

「分かりました。ちよつと待ってください」

紙袋を持つてお婆ちゃんが奥の間に片足を引きずりながら向かう。そのとき、別の若い男が入ってくる。

「お婆ちゃん！ 騙されるな！ こいつは事故現場でお婆ちゃんに電話していたお孫さんの話を盗み聞きしていた男だ！」

「畜生！ もうちよつとだったのに」

お婆ちゃんが振り返ると、最初の男がこの男を押しつけて玄関から外に逃げる。

「何のことやら」

お婆ちゃんがへなへなと座りこむ。

「確かに示談金が増えましたが、百万円増えて六百万円になっただけです」

「そうかい。分かりました。お前さんのお陰で騙されずに済んだ」

お婆ちゃんが頭を下げる。

「でも時間がありません。どこにお金を置いているのですか」

「こっちです」

お婆ちゃんが仏壇に進む。その前でヒザをつくとその下の扉を開ける。男もかがむと一億円以上の現金を確認する。お婆ちゃんはそのうちの一束を紙袋に入れると差し出す。

「！」

次の瞬間、お婆ちゃんが床に倒れて気を失う。そのとき先ほどの男が大きな黒いビニール袋を持って現れる。ふたりで仏壇下の現金を袋に入れると立ち去る。

\*

画面は逆田の沈痛な表情に代わる。

「このお婆さんは即死でした」

「始めの男と後の男はグルだったんだ！」

田中が断言する。

「他の事件でこの犯行グループは全員逮捕されました。そして余罪を追及されてこの犯行を自供しました。その供述に基づいて再現したものです。ところでこの事件が意味するところ分かりますか」

逆田が田中と大家を直視する。

「発端は詐欺だが、れっきとした殺人事件です」

田中がわなわなと拳を作って振るわせる。

「オレオレ詐欺なら騙されて振り込むだけで命まで取られなくて済む。でも今回は現金があだになって殺された」

「振り込め詐欺では面は割れません。でも現金を直接受け取れば面が割れます」

「顔を見られた以上殺さないといずれバレる可能性が高くなる」

「何という理不尽なことだ」

大家が嘆くと逆田が残念そうに解説する。

「話を戻しますが、原因の一つはあまりにも強化された本人確認です。これだけお金の出し入れの手続きが厳しくなると手元に現金を置こうとするのはごく自然なことです。しかも預金金利が極めて低いし、そのわずかな利息に税金もかかる。百万円を一年定期で預けてもその利息は銀行へ行く片道のバス代にもなりません」



「何のための規制なんだろう。こんなことで命を落とすなんて、お婆ちゃんが可哀想だ」

「この規制の前は銀行のキャッシュカードや口座の売買が盛んですが、減少傾向にあります」  
逆田の解説に大家が首を横に振る。

「何のことだ！」

「特に若い人。大学生など二十歳前後の若者に多いのですが、自分の口座がどのように使われるのかわからないまま、わずか数千円の報酬を貰ってインターネットで自分のキャッシュカードや通帳を売ります。もちろん相手は詐欺集団です」

「でも、騙した金をその口座に振り込ませても今まで以上に厳しい本人確認制度があるから引き出せないのでは」

「だから口座の売買は激減しました」

「何かむなしいな。規制を厳しくすると殺人事件が起こるなんて」

「わしはもつと根本的な問題があると思う」

「と言いますと？」

逆田がテレビの中から身体を乗りだす。

「なぜ、『オレオレ詐欺』に引っかかるのかだ」

田中も大家に視線を向ける。

「日頃から付き合いを密にしていれば、こんな幼稚な詐欺に引っかかるはずはない。たとえば、

親、子、孫が一つ屋根の下に暮らしていれば、奇妙な電話がかかってきても、誰かが詐欺に気付くだろうし、第一、孫だと名乗ってもその孫が目の前にいる」

「そうか。うちの親が今まで振り込め詐欺に合わなかったのは貧乏だからと思っていたが、僕がために実家に帰っていたからなんだ」

「うーん」

逆田と大家が首を横に振りかけるが止める。

「疎遠さがすべてかもしれん」

「でも年取ったら子や孫を呼び寄せたいでしょ」

「もちろん。でもアイツが言っていたのを覚えておるか」

「アイツ？ 立派な服の大家さんのことですね」

「わしはアイツが余り好きになれんが、こう言ってたな」

立派な服の大家は毎年孫たちに数百万円の贈与をしていたが、あるとき孫に「今年の贈与の振り込みはまだ？」と催促されたことに憤慨したと話していたことを田中が思い出すと逆田も頷く。

「わしはアイツを哀れに思うことがある」

「？」

「子や孫がアイツの財産を狙っているのだ。日頃からおじいちゃん、おじいちゃんと世話をし

ている訳ではない。しかし、弱ったときみんなが集まって親切にするだろう。アイツは身内の詐欺に引っかかるのだ」

「それは少し言い過ぎでは」

「それにあの女も曲者だ」

「リングラングですわね」

「そうだ」

「でも佐々木は？」

「うっ」

ここで大家の言葉が止まる。佐々木はいったいどういう理由で立派な服の大家に仕えているのか分からないからだ。

「他人からも身内からも財産を狙われるなんて金持ちは大変だな」

「想像していた結論から大幅にずれましたが、大変参考になりました」

逆田が頭を下げる。

「逆田さんはどんな結論を期待していたのですか」

逆田はそれまでの口調を一変して警告する。

「本人確認を厳しくすればするほど殺人事件に繋がってしまう、つまり単なる詐欺が殺人に進化してしまった。元々詐欺は騙される方も悪いという見方が普通だった。しかし、この事件を

見ると強盗殺人と変わらない。規制というものは強化すればするほど『いちぢごっこ』になるのならまだいい方で、エスカレートして殺人に至るのならすぐにでも他の防御策を考えなければ。これが重要だと今回の事件を通じて得た教訓です」

第三十六章  
揺れる家

### 第三十六章 揺れる家

「これを見せてくれ」

大家が田中の部屋に入ると封書を手渡す。

「固定資産税の決定通知書？」

「土地や建物にかかる税金だ」

「わあ！ 一億円」

「去年の百倍になっているのだ」

「百倍！ 大増税ですね」

「そうじゃない」

「どういうことですか。僕には何のことやらさっぱり分かりません」

「わしが持っているのはボロボロのアパート十軒とその土地と自宅だけだ。毎年百万円の固定資産税を支払っておるが、この明細を見せてくれ」

しかし、固定資産税という税金にまったく無縁な田中には明細を見てもよく分からない。

「それより、今気付いたのですが、大家さんの自宅はどこなんですか」

「！」

大家が腰を抜かしてひっくり返る。

「大家さん！ 大丈夫ですか」

返事がない。

「大家さん！」

田中が救急車を手配しようとスマホを手にする。そのとき大家が「うー」とうめく。

「大家さん」

大家が握りしめる固定資産税決定通知書の先頭の文字が田中の目に飛びこむ。

「立派な服の大家殿？」

「うう、田中さん……」

「救急車を呼びましょうか？」

「大丈夫だ」

大家は自力で身を起こして立ち上がろうとする。田中が背中に手を回すと、何とか大家が粗末な椅子に座る。

「確か自宅の庭から……ゴホゴホ」

田中が慌てて冷蔵庫からペットボトルを取り出す。

「レアメタルが出て……」

大家が口を閉じて咳を押さえる。

「大家さんはそこに住んでいるんですか？」

ほっとしながら田中はペットボトルの水をコップに注ぐと大家が頷く。

「もうひとりの大家はマンションに住んでおる」

田中が頷いてコップを手渡してから外に出るとさび付いた廊下の手すりに手を置いて周りを見渡す。そして駅前林立する高層マンションを確認する。

「あのどれかのマンションにいる立派な服の大家さんは元々レアメタルが出た自宅に住んでいたはずだ。そうすると僕が付き合っている大家さんはどこに住んでいたんだ？」

「そのとおりだ」

いつの間にか後ろに質素な服の大家が立っている。

「大丈夫ですか」

その質問に応えることなく大家が語り出す。

「昨日、カメラの話が終わって山本さんがテレビの中に消えたあと自宅に戻った。ところが、わしの自宅は堀に囲まれていた」

「えー。堀と言うと水があるんですか？」

「ある。わしは金槌だ。どうしようかと思案しながら堀の周りを歩いていたら橋があった」

「すごい敷地ですね。まるでお城みたいだ」

「昔は町外れの一軒家で農家だった」

「今すぐ、行きましょう」

有無を言わず田中は鍵を掛けると大家の手を引く。そして慎重に階段を下りて道に出る。

「それでその橋を渡って家に入ったんですか」



### 第三十六章 揺れる家

「もちろん……」

田中は大家の声を遮って尋ねる。

「家は大家さんが住んでいたそのものでしたか？」

「もちろん」

「鍵は掛かっていましたか？」

「もちろん。鍵を差し込んで中に入った」

「家の中は？」

「もちろん。中は以前と同じだ。ただ……」

「ただ？」

「家の中を歩くとひどく揺れるのだ」

「えー！」

「歳のせいかな、目眩を起こしたのかと思った」

田中の質問が続く。大家は記憶を確かめるように応える。やがて堀が見えてくる。

「あれですか」

「そうだ」

田中の想像がまったく及ばないほどの大きな家が見える。

\*

「きれいな水だな」

大家の家を囲む堀の水は周りの街並みから想像できないほどの透明度を持つ。

「金魚が泳いでいる」

堀はフェンスで囲まれていて「魚釣り禁止」という看板が貼り付けられている。

『『魚釣り』じゃなくて『金魚すくい禁止』とすべきじゃ？』

大家が思わず笑う。

「田中さんといると心が安まる」

ふたりは鋼鉄製の立派な橋を渡りながら欄干から下を覗く。大家の家はコンクリートの側壁で囲まれている。その側壁は池のかなり深いところまで施工されている。

「家の周りを掘ってレアメタルを取り尽くしたのかな。この堀、かなり深いですね」

「五百メートルもあるらしい」

「五百メートル！」

田中が覗くのを止める。池の水がなかったら断崖絶壁の縁に立っているようなものだ。

「スカイツリーの天辺から真下を見るのと同じじゃないですか」

「！」

大家が腰を抜かす。ようやく事の重大さに気付いたのだ。

「わしはスカイツリーの天辺に住んでいることになるのか」

### 第三十六章 揺れる家

「そういうことになりますね」

「しかし、眺めはよくない」

「だから立派な服の大家さんはマンションの最上階に引っ越したのか」

「それでアイツはわしがここに住んでも文句を言わなかったのか。しかし、わしはここしか住むところがないし……」

「でも、揺れるんでしょ」

「……」

大家が気落ちするが、すぐ手を叩く。

「前みたいにアパートに住めばいいんだ。なんなら田中さんと同居してもいい。毎日あのテレビが見られるし」

「同居！ あのアパート、僕の部屋以外、全部開いてますよ。せめて隣の部屋にしてくれませんか」

「ははは、冗談、冗談」

「でも、あのアパートもよく揺れますよ」

「ボロ屋だからな」

「大家さんに言われたんじゃどうしようもないな。でも冗談じゃなく倒壊するかも知れません

よ」

「確かに。地震が起これば……」

「個人的には地震が起こる前に潰れて欲しいな」

「なんだと」

「廊下も用心して歩かないと床が抜けそうです。それに階段も外れそうです」

「どちらに住むのも考えものだ」

「家賃がタダだから我慢してますが、お金を払ってまで住もうとは思いませんよ。だから空き

家だらけになったんです」

「どちらに住んでも揺れるのなら、やはり自宅に住むか」

「大家在田中に微笑むと田中が一步下がる。」

「まさか、僕に同居しろと言うんじゃない……」

「大家在背伸びして田中の肩を叩く。」

「さすが田中さんだ。察しが早い」

\*

窓から顔を出すとまるで水がなく底の底まで見通しがきくほどの透明度の高い水に満たされた堀が見える。

「高所恐怖症でなくても足が震える」

「金魚が空中遊泳しているように見えるだろ」

### 第三十六章 揺れる家

「大家さんのおっしゃるとおりですね」

「テレビはどこに置こうか」

「僕の部屋でいいですか」

さすが大家の自宅だ。部屋数は十ほどあってそのうちの比較的広い一室を田中が使うことになった。

「揺れはアパートの方がマシですね」

「少し慣れたが、始めは船酔いしたように何度も洗面所に行って吐いた」

「僕はあるアパートで慣れているから余り気になりませんね」

と言いながら田中がトイレに走る。

「やっぱり、ここに住むのは無謀なのか」

そのとき玄関のチャイムが鳴ると立派な服の大家とリングラングが入ってくる。

「お前、結構、太っ腹じゃな」

立派な服の大家が靴を脱ぐと勝手に応接室に入る。リングラングも赤いハイヒールを脱ぐと続く。

「パパ、揺れてるわ！ 地震だわ」

「狼狽えるな。地震じゃない」

「なんの用だ？」

「田中さんは？」

「洗面所だ」

「そうか」

質素な服の大家も応接室に入る。

「田中さんに何用だ」

「テレビのことで聞きたいことがあるのじゃ」

立派な服の大家がレザー張りの黒いソファーにやんわり座るとリングラングも部屋に入ってくる。

「アパートに行ったけれど、いなかったの。ここにいるんじゃないかと」

リングラングがドアを勢いよく閉めると部屋が揺れる。そのとき質素な服の大家がたまらず倒れる。その上にリングラングももんどり打って倒れる。

「おい！ 大丈夫か」

ようやく田中が応接室に姿を現す。

「大家さん！」

大家の上のリングラングを引きずり下ろしてひざまずく。

「こんなところにいると死んでしまうわ」

田中が頷くと質素な服の大家が目を開ける。何も言わずに立ち上がってトイレに向かう。

「リングラング。ここではそつと歩くのじゃ。それにドアも静かに開け閉めするのじゃ」  
そして立派な服の大家が田中に近づく。

「例のテレビ、まったく電源がはいらんのじゃ。なんとかならんか」

「例のテレビ？」

「田中さんから譲り受けた……」

——あつそうか。大家がふたりいるから、あのテレビも二台あることになる

「……何も映らんのじゃ」

「僕は電気屋さんじゃありません。修理はメーカーに問い合わせてください」

「メーカー？」

「オレンジ社です」

「パパッ オレンジ社が中国でテレビを発売したけれど大騒動が起こっているわッ どうなっているのッ 中国に行かなければ……」

「待て。田中さんのテレビが中国の騒動を報道しているかもしれん。それを確かめてからでも遅くはない」

「私、待てなッい。中国に行くわッ」

「やむ得ん。中国はお前の祖父の祖国じゃ。すぐ帰れ」

「ありがとう。パパッ」

### 第三十六章 揺れる家

「今度は静かにドアの開け閉めをしろ。それに静かに歩け」

しかし、お構いなしにリングラングは乱暴にドアを開けるとそのまま玄関に走り出す。立ち上がるうとした立派な服の大家がそのままソファーに倒れこむ。思わず田中もしゃがみ込む。そのとき質素な服の大家の悲鳴が聞こえる。

「わあああ」

田中が這うように応接室を出るとトイレに向かう。幸いドアはロックされていなかった。そこには便座にすっぽりと尻を突っ込んで仰向けになって手足をバタバタさせる質素な服の大家がいた。

「落ち着いてください。バタバタすると家が揺れます」



第三十七章

税理士を雇わずにキチンと税金を方法

「どこもおかしなところはありませんね」

立派な服の大家のマンションの応接間にある例のテレビを田中が眺める。

「そうか。仕方ないな」

立派な服の大家が諦めると質素な服の大家が思い出したように手に持っていた色あせた革の手提げ鞆から固定資産税の書類を取り出す。

「自宅とボロアパート分の固定資産税は払うが、他の固定資産税はお前が払え」

「そうはいかん。お前が払え」

「なぜだ」

「わしの預金通帳を持つとるじゃろ」

質素な服の大家がハツとすると鞆の中を覗いて通帳を取り出す。

「そう言えば、バカに桁数が多い通帳を支店長から手渡されたのう」

「その通帳はわしのものじゃ。返してくれるなら、わしが払う」

「もう銀行とは付き合わんから通帳なんかいらん」

「お前も金に不自由しておらんのか」

「金の出し入れに不自由しておる。返すぞ」

通帳を受け取ると立派な服の大家がめくる。

「ほー。一円も出金していないな」

「当たり前だ。わしの金じゃない。奇妙な経緯があつて支店長から預かっただけだ」

「わしに似て正直者じゃ」

「何！ そんなこと、お前に言われたくないわい」

「質素な服の大家が立派な服の大家に突つかかる。」

「待ってください」

田中が仲裁に入る。

「立派な服の大家さん。残高が一〇兆円もの預金通帳を質素な服の大家さんが持っていて驚かないのはなぜなんですか」

「わしや金に困つたらん」

「そりやそうですけど」

「これだけの大金になると通帳など関係ないのじゃ」

そのときあのテレビが輝き出す。

「わあ！ 電源が入った！ 故障してないじゃないですか」

画面に山本が現れる

「通帳だけではお金を出せないわ」

「あつそうか。印鑑が要る」

「それに身分証明書もじゃ」

山本から立派な服の大家に田中が視線を移す。

「でもカードがあれば？」

「カードでは一日五十万円しか出金できないわ。残高が一〇兆円もあるから、ゼロが多すぎて計算できないけれど一生かかっても降ろせないはず」

「五十万円と言えば僕なら一回降ろすだけで十分すぎるお金だ」

ここで両大家が同時に発言する。

「わしはカードを作っていない。すべて窓口で用をこなす」

ふたりが顔を見合わず。そして再び合唱する。

「しつこい本人確認には参るが」

両大家が苦笑いする。ここで先ほどまで緊迫していた雰囲気緩む。

「しかし、ややこしいことになったもんじゃ」

「そのとおり」

「取り敢えず、この固定資産税と償却資産税はわしが払う」

「償却資産税？ 固定資産税のことなら多少知っています、償却資産税っていうのは？」  
テレビの中から山本が突っ込む。田中には何のことか分からない。したがって沈黙する。

「固定資産税とは……」

「またもや両大家が同時に声を上げる。再び顔を見合わずと質素な服の大家が譲る。」

「お前さんの方が資産家だ。わしは辞退する」

「固定資産税というのは土地や建物にかかる税金じゃ」

山本がそして少し遅れて田中が頷く。

「償却資産税というのはわしの場合、仕事に使う備品に掛かるものじゃ」

「仕事に使う備品？」

「自動車は自動車税とか色々な税金がかかっているから償却資産税の対象から外れるが……えーっと」

ここで質素な服の大家が助け船を出す。

「山本さんの会社では放送機材やコピー機や通信機器やパソコンなど様々な備品があるはずだ」

「ええ。それで？」

「そうそう、そういうものにかかる税金が償却資産税じゃ。わしも数年前まで知らなかった」

ここで質素な服の大家が一息つくと立派な服の大家が引き継ぐ。

「ところが、高層マンションを建設して事務所を自宅からマンションに移すとたちまちコピー、椅子、机、応接セット、金庫とか、とにかく備品が増えたのじゃ。そのころ橋本市長と知り合ったんじゃが、市役所の税務課の職員からわしが償却資産税の申告をしていないという指摘があった」

ここで再び山本の突っ込みが入る。

「大家さんほどの資産家なら税理士を雇っているのでは」

「その税理士は『こまごまとした備品なんか市役所には分からないから、償却資産税の申告を敢えてする必要はない』とぬかしたのじゃ」

「しかし、確定申告でコピーや応接セットなんかは減価償却して申告しておくぞ。税務署に確定申告すれば住民税の申告をしなくても税務署から市役所に通知される。だから住民税の納税通知書が市役所から届く。償却資産税も同じでは？」

質素な服の大家に立派な服の大家が応じる。

「確かにそうじゃ。会社なら税務署や県や市にそれぞれ申告書を出すらしいが、個人は税務署だけでオーケーじゃ。確かに住民税の通知は来るが償却資産税は来ないぞ。お前のところには来てるのか」

「いや、来ない。だから自主的に申告しておく」

両大家の会話が落ち着いたのを見計らって田中が尋ねる。

「ところでゲンカシヨウキヤクってなんですか」

「安モンの椅子や机は経費にすればいいが、高い椅子や机はすぐに経費扱いできんのじゃ」  
立派な服の大家が座る椅子を田中が見つめる。

「その立派な椅子はいくらで買ったんですか」

「椅子と机のセットで五百万円じゃ」

「ご、ご、五百万円！ 僕が買ったテーブルと椅子は合わせて九八〇〇円でした」

「そんな安物はすぐ経費にできる。じゃが高級なものはすぐ経費にはならんのじゃ」

田中がキョトンとする。

「家賃収入が十億円あったとする。そのとき十億円の賃貸マンションを買えば差引ゼロになるという訳にはいかん」

「お前、毎年十億円も儲けているのか」

質素な服の大家が咬みつく。

「うん？ まあな。配当も足せばそんなもんじゃ」

質素な服の大家が腰を抜かすが、田中は立派な服の大家の話が大きすぎて再び黙る。

「そのマンションが五十年持つとすれば大ざっぱに言うと十億・50で二千万円ずつ毎年経費にするのじゃ」

田中が口をもごもごするだけなので山本が補足する。

「五十年間家賃が入ってくるから、それに対応するように十億円のマンションも五十年に分けて経費にする。その計算を減価償却と言うのです」

「さすが山本さん。そのとおりじゃ」

何とか会話を整理して田中が口を開く。

「税務署も賢いですね。税金がゼロになるのを減価償却で防いでいる」

「そうじゃない。山本さんの話を理解していないな」

再び田中がキョトンとする。

「マンションを買った年に全部経費で落とすとその年は大赤字だ。赤字の繰り越しはこの際無視するが、それに経費がないとしたら翌年から家賃収入全部に税金が掛かることになる」

何とか田中が質問する。

「またマンションを買いええば？」

「そんなこと永遠にできないわ」

「あつ、そうか。次の年からはお金が出て行かないのにこの減価償却費が経費で落とせる」

「そうじゃ。田中さん！ よく気が付いたな」

褒められた田中の顔が少し赤くなると立派な服の大家が続ける。

「最初の一年は十億円の資金が消えるが、残り49年はお金が出ないが減価償却費が経費にできる」

ここで質素な服の大家が口を挟む。

「最初の年の資金が苦しいのならローンを組んで五〇年かけて返せばなんとかなる」

「普通の人間はそのようにする。つまり銀行が借金を勧めるのじゃ。そして借金地獄に陥るのじゃ」

「普通の人間で悪かったのう」



「わしは金持ちじゃ。借金はせん。全部キャッシュで払う」

「同じ大家さんなのに考え方がまったく違う」

この田中の言葉に質素な服の大家が怒鳴る。

「どうせわしは貧乏大家だ」

田中が驚いて質素な服の大家を見つめる。

「僕の方がずーと貧乏です」

「なるほど」

\*

「固定資産税、つまり不動産を持つてる人に掛かる税金は法務局にその不動産の登記をするからすぐ市役所に見つかるわ」

「法務局って？」

山本の説明を中断して田中が尋ねる。

「登記所のことよ」

「登記所？」

山本は田中を無視して説明を続ける。

「一方、備品は外から見えないし、登記する必要もないから市役所も分からないわ。だから償却資産税を申告する正直者はほとんどいないことになるの」

いつの間にかテレビから出てきた山本が問題点を指摘すると、ようやく道理を理解した田中が少し興奮気味に発言する。

「そこで税理士が悪知恵を立派な服の大家さんに耳打ちしたんだ。税理士はキッチンと申告させるのが仕事なんでは？」

「建前ではね。それで立派な服の大家さんは税理士さんにどう対応されたのですか」

「当然、首だ」

「へー！」

田中が細い目を丸くすると質素な服の大家が感心する。

「勇気ある行動だ」

「なぜですか」

「個人情報ของすべてを税理士が握っておる」

「なるほど！」

「アホか」

立派な服の大家がかんらんかんらんと笑う。しかし発言する者がいないので自ら言葉を繋ぐ。

「わしも税理士の個人情報を持っておる」

「どんな？」

「さつきも言ったじゃろ」

「償却資産税の申告をするなどという脱税発言のことですか？」

「そうじゃ。税理士は脱税指南をしてはいけないのじゃ。わしは隠し立てせずすべて申告しておる。まあ、少し特殊なやり方じゃが……それに税金を納める金に不自由しておらん。確かにわしはにわか成金じゃが、貧乏なとき金持ちになったらキッチンと払うものは払おうと思っただけだ」

ここで立派な服の大家の目元が崩れる。

「正直言つて、それまで余り税金を払っていなかった」

「やっぱり！ そこがわしとは違う」

質素な服の大家が胸を張るが、立派な服の大家は恥じることなく言葉が続ける。

「先ほどの税理士に無理言つてウソの申告をしていた」

「その税理士を首にして正直に申告しているのはそのときの償いか？」

「貧乏なときは税金を敵視していた。でも余裕ができれば正しい申告はもちろんのこと、納税はキッチンとすべきじゃ。しかし、今の世の中、逆だ。大金持ちほど脱税するし寄付もせん」

質素な服の大家が引き継ぐ。

「それどころか政治家が寄付金控除という制度を使って税金を少なく申告しているぞ」

すぐに立派な服の大家が引き継ぐ。

「つまり議員が政治献金と称して自分が所属する政治団体に寄付して寄付金控除という税金が

安くなる特例を受けてから、その団体にキックバックさせて金を受け取っておる」

山本が気色ばむ。

「今まさに私たちのスタッフが取材して追求しています」

「議員は法律的に問題ない節税だと抜かしておる」

田中も憤慨する。

「仮にそうだとしてもその議員の人間性を疑う。モラルの欠片もない！」

「そうじゃ！ もっとマスコミが突っ込まなければならんのに、何をしておる！」

「取材を徹底しなければ」

山本が頭を下げると両大家が頷く。

\*

質素な服の大家が立派な服の大家に尋ねる。

「さて、新しい税理士を雇ったのか？」

立派な服の大家が首を横に振るので全員が首を傾げる。

「申告は自分ですか？」

「しない」

「じゃあ、誰にしてもらうのだ」

「専門家じゃ」

「税金の専門家は税理士でしょ？」

田中が立派な服の大家に尋ねながら山本を見る。その大家が首を横に振るが山本は縦に振る。少し間を置いてから山本が手を叩く。

「税務署を辞めて税理士になった人に頼むんだわ」

「ブー！ いい線を突いておるが、ハズレ！ 退職した税務署員も税理士になるから、税理士じゃ」

「じゃあ誰に？」

山本が穴の開くほど立派な服の大家を見つめる。

「税務署の職員じゃ」

「えーっ！」

大合唱が起こる。

「現職の税務署員を雇うのか」

「アホ！」

「!?!」

「はっはっはっ」

立派な服の大家が顔全体を皺くちやにして大笑いする。笑いすぎたのか口から入れ歯が飛び出す。

「ふが、ふが」

慌てて落ちた入れ歯を拾うと口を大きく開けて収める。

「汚い！ 洗った方がいいわ」

「大丈夫じゃ。一〇数える間に拾ったからバイ菌は付いておらん」

誰もが呆れ返ってまじまじと立派な服の大家の口元を見つめる。田中がいち早く冷静になるとしつかりと尋ね直す。

「種を明かしてください」

立派な服の大家が口元をぐっと引きしめてから応える。

「わしは何もせんのだ」

「申告しないということですか」

「そうじゃ」

「税務署は見逃さんぞ」

すごんでみせる質素な服の大家に頷きながら続ける。

「見逃してくれたらラッキーじゃが、あんたの言うとおりに見逃さんじゃ。必ず調査に来る」  
「おっしゃるとおり無申告だと当然税務署は調査に来ますね」

今度はその山本に頷きながら続ける。

「しかも団体でご登場だ」

得意満面な立派な服の大家に圧倒されて山本も田中も質素な服の大家も黙って話の続きを待つ。

\*

応接室で立派な服の大家が数人の税務署員に頭を下げる。

「毎年ご足労をおかけして申し訳ありません。しっかり調べて税金を請求してください」

大家が立ち上がると机の引出を開けて鍵の束を取り出す。そして応接セットのテーブルに置く。ガチャツと音がしたあと大家の口調が変わる。

「金庫や机やこのマンションのありとあらゆる鍵と銀行の貸金庫の鍵やその他もろもろ鍵じゃすべて預けるから調べてくれ」

税務署員が驚いて大家を見つめる。ようやく統括国税調査官という肩書きの中年の職員が口を開く。

「こんなものを預かる訳にはいきません」

しかし、大家は意にも介さず立ち上がる。

「去年は黙って調査してくれたぞ。わしは忙しい。あとはご自由に」

大家が部屋を出ようとする。

「待ってください。困ります」

「なぜじゃ」

「調査中にお尋ねしなければならぬことが多々あると思いますのでお付き合ってください。それにお金や貴重品が無くなったりすると何かと困ります」

「あなた達は公務員じゃろ？」

「はい」

「公務員が盗みを働く訳がない。わしは信用しとる」

「もちろんです。でも調査中にお聞きしなければならぬ……」

「今日一日で調査が済むのなら、いよう。でも数日はかかるはず。始めに『調査は少なくとも三日かかります』とおっしゃったのをお忘れか」

「それはそうですが……」

「だったら三日目か四日目にまとめて聞いてくれればいいのじゃ」

「とにかく困ります」

「わしも困る。なんぼでも払うから、よろしく」

さっさと大家が部屋を出るとドアが閉まる。

「待ってください」

国税統括調査官が大家を追いかけかけるがドアが開かない。

ドアの向こうからかすかに大家の声がする。

「自動ロックがかかったようじゃ」



「大家さん！ 開けてください！」

ドアを叩いて税務署員が怒鳴ると大家もドア越しに怒鳴る。

「ご心配なく。渡した鍵で部屋から出られる！ ごゆっくりと得心のいくまで調査してください！ 明後日の昼過ぎに戻ります。万事よろしく！」

\*

「それでどうなったんですか」

田中が代表して結末を急かす。

「いくつかの質問に答えただけで、数日後『決定通知書』と『納付書』が送られてきたので、税金を支払った」

「でも罰金がかかったでしょ」

「もちろん。期限内に申告や税金を納めていないので無申告加算税と延滞税がかかった。もちろん、それも払った」

「無申告加算税が罰金ですね。延滞税というのは？」

「利息のようなものじゃ」

「ちゃんと申告して税金を払っていたらかからないのに、もったいないなあ」

「ここで少しは税金の知識を持つ質素な服の大家がおもむろに口を開く。

「一〇億円も儲ければ所得税だけでも四億ぐらいの税金がかかるはずだ。無申告の場合の罰金

は20パーセントだと聞いたことがある。四億円に加えて八千万円も罰金を払ったのか」

「アホ。払った税金は二千万円ぐらい。加算税は四百万円ぐらいで延滞税は二十万円ぐらいじやった」

「まさか！」

「わしの儲けの大半は株の配当と売買じゃ」

しばらく黙って聞いていた山本が口を開く。

「どういことですか。私にはさっぱり分かりません」

立派な服の大家が山本を見つめて驚く。

「才女の山本さんとあろう者が？」

山本が電卓を叩きながら応える。

「解説委員は別としてニュースキャスターの知識は意外と低いのです。結局、税金のことなら国税当局や税理士に取材して理解するのが関の山です。いずれにしても、なぜ一〇億円も稼いで申告せずにはあったらかしたのに罰金が儲けの0・4パーセント程度で済むのか理解できません」

「わしもこの間税務調査を受けた。入居者から預かった保証金のうち退去時に返さなくてよいお金は家賃と同じ収入だと言われて過去に遡って合計一千万円もの収入漏れを指摘された。税理士に伝えておくのを忘れた自分も悪いが、税理士は何も尋ねてくれなかった。結局三百万円

余りの税金と五十万円近い過少申告加算税と延滞税を納めた。一方わしは税理士に年間五十万円支払っておる」

「わしなんか六百万円も払っておる。それなのに帳簿を付けろとか、契約書を見せろとか手間ばかりかかる」

「同感だ」

両大家の意見が一致する。

「税務署員に直接税金の計算してもらえば間違いないし、手間もかからん。それに税理士に払う顧問料より罰金の方が安い。その時間でもっと他の商売ができる」

「なるほど。わしもそうしよう」

「ちよつと待ってください」

「質素な服の大家さんの場合一千万円の儲けに対して罰金は5パーセントですね。立派な服の大家さんのほぼ十二倍以上だわ。質素な大家さんの罰金は高すぎるわ」

電卓を叩き続ける山本に強く同調しながら田中が疑問を繰り返す。

「なにか、おかしいな。どんなカラクリがあるんですか」

「わしは改めて全員に言う。アホ」

田中は「アホ」と言われても気にせず立派な服の大家に教えを請う。

「僕には余り関係ないことだけど、是非教えてください。とにかく不思議だ」

山本も目線で田中に追従すると立派な服の大家が話題を変える。

「ところで、こんなバカげた物語を書いておる著者の本業を知っておるか？」

誰も首を横に振って顔を見合わす。

「わしはリングラングと山本さんが合体したり、佐々木と田中さんが合体したり、そして分離したりしたとき、わずかな時間じゃったが、著者と意見を交わしたことがあった」

「えー！」

驚きの大合唱の中から抜け出したのは田中だった。

「僕が主人公ではないのですか」

「逆田に騙されてテレビを買ったアホな男が主人公になるはずがない」

立派な服の大家が否定する。

「でもあのテレビの電源は僕がいないと入りません」

「そうね。田中さんに分があるわ」

「何を言う。わしが主人公じゃ」

立派な服の大家が立候補する。

「著者はこの物語は長編小説だと言っておった。お前は前座に過ぎん。わしが主人公じゃ」

「さて、この先どうなるのかしら」

「山本さん。傍観者的な見解は止めてください」

「どうして？」

「僕はいずれ山本さんと結婚するんだと思います」

「えー！ 私……」

山本の言葉を遮って質素な服の大家が笑顔で田中を見つめる。

「今まではつきりとももの申すことがなかったのに、なぜ急に断言した」

「いや、それは……僕も佐々木と合体したり……。そのー、何と言ったらいいのか、著者と何度か会ったような、会っていないような……」

それを聞いた質素な服の大家が少し安心したような表情を浮かべながら田中の手を握る。

「誰が主人公なのかは読者が決めることだ」

ここで立派な服の大家が折れる。

「そうじゃな」

\*

「話を元に戻しましょう。立派な服の大家さん。カラクリの説明をお願いします」

田中が提案する。

「十億と言ってもじゃ、その儲けの中身が問題なんじゃ」

「中身？」

「所得の種類の違いじゃ」

「種類？」

「それなら知っています」

ここで山本が立派な服の大家に代わって説明する。

「株の配当は配当所得。預金の利息は利子所得。サラリーマンの場合は給与所得。そして退職して退職金を貰うと退職所得。モノ、典型的なのが不動産、それを売買して儲けると譲渡所得。大家さんのように不動産を貸して地代や家賃を稼ぐと不動産所得。魚屋さんや電気屋さんや農家は事業所得。えーとそれから懸賞に当たると一時所得……山林所得っていうのもあったわ。それに……」

山本が指を折る。

「まだ何か抜けているわ。あつ、そうそう。年金は雑所得」

「へー、すごいな」

田中が目を丸くして山本を見つめる。

「税理士の著者から横槍がはいらんのお。そうすると山本さんの説明は合格なんだろう。さて、わしの所得のほとんどが株の配当と売買利益じゃ」

「高層のビルを十棟以上お持ちなのでは？ ほとんどのビルの一階から三階までを店舗に四階以上をマンションとして貸してるんでしょ。すごい家賃収入が入るんじゃない？」

「そうじゃな。年間二〇億円は下らん」

「えー！ 二十億円」

「残念ながら、わしとは桁がふたつも違う」

質素な服の大家も田中と同じように驚く。

「まあまあ、そんなに驚くな。収入が二十億円でも経費がそれに近いぐらいかかっておる」

「どんな経費なんですか」

「さつき話した減価償却費がものすごい。じゃが、建てたときにドピヤツと金が出て行くが、あとは金が出て行かない減価償却という経費が毎年引けるから非常に助かる」

「それは先ほどの話でよく分かりました。でも始めに大金が必要……。あつ、そうか。レアメタルで大儲けしたんですって。話の腰を折ってすいません。他の経費は？」

「田中さん。まるで税務署員みたいだな」

ここで少し雰囲気が和やかになる。

「田中さんが税務署員だったら緊張せずに調査を受けることができる」

質素な服の大家の表情も緩む。

「固定資産税も高い。償却資産税もかかる。管理費もすごい。損害保険料もバカにならない」

「管理費？」

「管理会社に任しておるから細かいことまで分からんが、最も多いのは管理人やガードマンの人件費。それにエレベーターなどの機器のメンテナンス料。そうじゃ、原発事故以降、円安で

電気代がすごく高くなった。思い出した。さらにこんな経費も……」

立派な服の大家の説明に少々飽きてきた田中がズバリ尋ねる。

「要するに賃貸事業の儲け……えーと不動産所得はいくらなんですか」

「二千万円ぐらいじゃ」

山本が飛びあがって驚く。

「二十億円も収入があるのに儲けはたったの1パーセントの二千万円しかないのですか」

『「たった」じゃないよ。山本さん。二千万円ってすごい金額だ』

「でも二十億円もお金が入ってきて残ったお金が一〇〇分の一よ」

「減価償却費が十億円もある。これはお金として出て行かない」

「そうでした」

「ところで何の話をしていたんだっけ」

「申告しなかったたので税務調査がはいつて税金を納めたけれど、その罰金の額が減茶苦茶少ないのはなぜだという話」

「そうそう。なぜなんでしょう」

「だから言っておるじゃろ」

「意地悪しないでそろそろ答えを聞かせてください」

「わしの儲け、つまり所得のほとんどは申告しなくてもいいモノばかりなのじゃ」



「株の配当や売買の所得のことですね」

「わずかじゃが利息もある」

「なぜ申告しなくていいんですか」

「証券会社が税務署の代わりに株の配当や売買の利益をその都度計算して天引きしてくれるのじゃ」

「そう言えば利息にかかる税金も銀行が勝手に差し引いてるいわ」

「僕なんか、差し引かれたことがない」

「そんなことないはずよ」

山本がバッグから預金通帳を出して、あるページを田中に見せる。

「たった二〇円しかない利息に国税三円、地方税一元、合計四円、差引十六円。ほら！」

「20パーセントもとられるのか。二十円ぐらいだったら見逃してくれればいいのに」

なぜここで田中が預金通帳を持っているのかということは不問として、田中はそう言いながら自分の預金通帳を開く。

「一元利息が付いているけど、税金は引かれていない。さすがに一元だから見逃してくれたんだ」

「一元に20パーセント掛けても切り捨てで税金はかからんのじゃ。国税の税率は15パーセント、地方税は5パーセント掛けて計算するのじゃ」

「この種の税金は申告しなくてもいいのか」

「そのとおりじゃ」

「大家さんの儲けの大半が利息と株の配当と売買だという意味がよく分かりました」

「しかも株の配当と売買利益にかかる税金は利息にかかる税金の半分、つまり10パーセントなんじゃ。いずれ20パーセントになるようじゃが」

「えー！」

もう何回、田中や山本が叫んだことか。

「貧乏人は株を持っていないし、ましてや株の売買なんかしたこともない。金持ちはいいなあ」

「まだある」

「何があるんですか」

「株の売買で損をしても儲けた分と相殺できるし、配当からも引いてくれる。だから安心して投資ができる」

「うらやましいな。金持ちは優遇されているんだ」

田中は単純に反応するが山本は違う。

「株の売買損失を配当から引けると言うことは、配当にかかった10パーセントの税金が戻って来るんですか」

「そうじゃ」

「利益が出てても10パーセント。損が出ると税金が戻ることもある。やっぱり田中さんの言うとおりに金持ち優遇だわ」

「そうでもない。株式投資を活発化させないと企業の資金調達が円滑にできんし、起業する者もいなくなる。それに年金の運用先の選択肢が減る。経済が回らなくなるのじゃ」

「でも預かった資金を株に投資していた年金運用会社が投資に失敗して年金基金が破綻したりするわ」

「それは運用者の問題じゃ」

「『今度上場するからこの株を買えばよろ儲けですよ』なんてお年寄りを騙したりしてるじゃないですか」

「それに証券会社は大口の得意先に損失補填する。逆に大口の得意先から接待を受けて情報を漏らしたりする。これは取材したので間違いのない事実です」

「詐欺はいかん。一方、特定の客をえこひいきするのは法律違反だし、モラルの問題じゃ。手数料目当てに売買の回数を増やそうと勧誘するのも問題じゃ。昔から証券会社はうさん臭いことをしてきた。だから『株屋』と見下げられるのじゃ」

「立派な服の大家さんの言うとおりに証券市場が経済にとって大事なものなら、透明性を高めるべきです。でも不祥事が絶えません。何も日本のことを言っているではありません。世界的に問題があります」

「山本さんの言うとおりにじゃ」

ここで山本が神妙な顔つきをする。

「どうしたんじゃ」

「もし、政府や県庁や市役所が会社だったら、その会社の株式を買う人はいるんでしょうか。赤字財政で普通の会社で言う配当に当たる住民サービスがないとしたら、そんな会社の株を大家さんは買いますか？」

「買わん。しかし、たとえば橋本市長のように頑張る社長なら寄付をする。最近背伸びしているのが気に食わんが、まず市政を充実することが大切だ。若いから先は長い。あせらず市政にうちこんで実績を重ねるのならもつと応援するのじゃが」

質素な服の大家に立派な服の大家が大きく頷く。

「なるほど」

第三十八章  
半透過ミラー

「さて、最近は領土問題や北朝鮮の話題が多いなあ」

「そんなことはないわ。ヨーロッパやイスラム国家の話題も強烈よ」

「それに比べて日本の話題は質素だな」

「つまらん清掃を繰り返しておる」

「おっと。著者が誤字を！ 『政争』と書きたかったんでは？」

「……」

「いや、真剣な『政争』なら意味があるうが、国民を無視した茶番劇をしておるから『清掃』、つまり政治をクリーンにしようと言いたいのかも知れんぞ」

「連載が長くなったので疲れが出たのかと思った」

「領土問題も相手の領海侵犯や実効支配が起こってから大騒ぎする。それまでいったい何をしていたんじゃ」

立派な服の大家の立腹に質素な服の大家が賛同する。

「中国やイスラム国家に進出した日本企業の社員が人質になったり殺されたりしてから、政府は『ああだ、こうだ』とわめくが、根本的な対策はこれっぽっちも出てこない。それにこのような想定された事件にいつもの『想定外』を繰り返すだけだ」

山本が首を振る。

「待って。鈴木一佐は違うわ」

「そうじゃ。今彼はどこにいるのじゃ」

「国連の実務総長です。紛争地域を飛び回っているそうです」

「グレーデッドの動向はどうだ？」

田中が急に立ち上がるとテレビに近づく。

「山本さんが出てきてからは反応しませんね。やっぱりアパートの僕の部屋でないと電源が入りにくいのかなあ」

質素な服の大家が同調する。

「同感だ。アパートに戻ろう」

「やむを得ん。わしも行く」

立派な服の大家も同意する。

「じゃが、このテレビは？」

「アパートにもあります」

「えっ？ ここに持ってきたのに。おかしい！」

田中が山本を睨む。

「でも、あるんです」

\*

「わあ！ いきなり電源が入った」

田中の部屋のテレビから逆田が姿を現す。

「やはり、ここが落ち着きますね」

逆田がいったん微笑むが、すぐ厳しい表情をする。

「皆さんがこのテレビを見るのをさぼっている間に、様々な事件が起きました」

「この前見てから二日しか経っていないのに」

「中国の高速鉄道の事件はどうなったんじゃ」

「収束しました。中国政府はシラを切りましたが、チェンの努力とこのテレビと同じオレンジ社のテレビが真実を次々と暴露したので、人民を騙すことができなかつたのです」

「中国政府がシラを切ると言うが、チェンは中国の総書記の懐刀じゃないか。その総書記は政府そのものじゃないか」

「中国の人口は今や十五億人とも言われています。中国政府ですら正確な人口を把握していません。それはさておき、総書記と言っても権力闘争でなんとかトップになつただけで権力基盤は決して盤石とは言えません。一党独裁の国家だから安定しているように見えますが、選挙を通じて大統領を選ぶアメリカや、間接的ですが第一党から首相が選ばれる日本と同じようにトップの地位が安定的だとは言えません。そこが政治の難しいところです」

「結果としてこのテレビの映像が事態を收拾させたのか」

田中が確信する。



「そうです。このテレビの映像に脚色はありません。ありのままを伝えます。カットもありません。むしろ、見えないところまで拡大して伝えます。見るに堪えない映像もそのまま伝えます。作為的に造られたものなら、その作為的な意図も赤裸々に伝えます」

ここで田中の横にいた山本が画面に吸いこまれて逆田の横に現れる。立派な服の大家が仰天するが、田中や質素な服の大家は慣れているから平気だ。

「この程度のことでは驚いていたんではこのテレビを見る資格はないぞ」

質素な服の大家が久しぶりに優位に立つ。

「すべてをあからさまにする。このテレビは」

山本が質素な服の大家に微笑みかける。

「そうです。正直者にはこのテレビに抵抗感はないどころか、映像に快感を覚えるでしょう。

ごまかそうとする権力者のそのよんだ心理を映し出すからです」

「おかしい！」

立派な服の大家が待ったを掛ける。

「真実の映像を伝えることに異議はない。最近、マスコミはこの原則を忘れたかのような報道が多いのは大問題じゃ。話が逸れたが問題はどうかやってそんな映像を誰が撮影しているのかじゃ。撮影者が邪悪な人間だったら撮影段階で事実が曲げられてしまうぞ。それをどうやって防いでいるのじゃ」

立派な服の大家がツバをまゆ毛に塗って山本の返事を待つ。山本ではなく逆田が応える。  
「半透過ミラーを搭載した撮影機を使います」

田中が疑問符を付けて議論に参入する。

「半透過ミラー？」

逆田が一呼吸置いて応える。

「その前に前編（第二編）の『ミラーアリカメラ』（第三十四章）を読んでください」

\*

「なるほど」

「一眼レフカメラでミラーが重要な役目を果たしていること、分かっていただけでしたか」

「被写体を人間の目と撮像素子のどちらに届けるのかを決めるのがミラーの役目です。四十五度の角度を持ったミラーは通常被写体を人間の目に届けます。そのままでは上下が逆転しているので五角形のガラス体、ペンタプリズムを介して正像を目に届けます。ミラーが跳ねあがると今度は撮像素子に被写体が到達して画像として保存されます」

ミラーの機能を田中が詳しく説明すると逆田が大げさに頷く。

「さて、そのミラーが、もし半透明ならどうなるのでしょうか」

「半透明？」

「そうです」

「もし光の量が10だとするとレンズから入ってきた半分の5が撮像素子に進む。もう半分の5の光は反射して上に向かってペンタプリズムを通して目に届くことになる。こういうことですか」

「さすが田中さん」

「勉強したんです。貧乏な僕なんか高級カメラを買うことができない。まあ、どうでもいいか。でも光量が半分になったらその分暗くなるからピントが合わせにくくなるのでは？ レンズの絞りを絞ると暗くなってピントが合わせ辛くなるのと同じことが起こるのでは？ 今のカメラは開放状態、つまり絞らない一番明るい状態でピントを合わせ。しかも人間が合わすんじゃないかってカメラが合わす」

「オートフォーカスですね。この機能のお陰で私でも簡単にきっちりピントが合った写真が撮れるわ」

「もつと深刻な問題がある」

逆田は口を挟まずに田中の話を黙って聞く。フィルムカメラに詳しい質素な服の大家もデジタルカメラに詳しくないので黙って聞いている。

「昔で言うフィルム、つまりデジタルカメラの撮像素子に半分の光量しか届かなければ、鮮明な画像が得られない。ということとは極端な話、ぼやーとした写真しか撮れないのでは？」

「そんなことはない……と思う」

質素な服の大家が遠慮を放棄するが強い発言ではなかった。

「そ、そうですね。でもレンズを絞り込んで撮った写真は鮮明です」

「何十分の一に光量が落ちても鮮明な写真は撮れるぞ。ただしシャッタースピードが落ちる」

「そのとおりです。シャッタースピードを落として受け入れる光量を増やすんです。でもぶれる可能性が高くなる」

「話が難しいわ。半透明のミラーを使うと何が問題になるの。あるいはそのメリットは何なの」

山本が結論を急かす。

「要は半透過のミラーをレンズに対して四十五の角度で固定しておけば撮像素子にもファイバーにも光が届く」

「そうすると撮影するとき、いちいちミラーを跳ねあげなくて済む。絶えず被写体のデータを撮像素子が収集できるし、撮影者も撮影される被写体そのものを絶えず見ることができる。つまり写そうとする被写体を確認できることになる」

「ミラーが跳ねあがった瞬間、真っ暗になって何が映ったのか背面のモニターで確認しなくて済むというメリットね。私はそこまで凝って写真を撮ることはないし、別に多少タイムラグがあっても気にしないわ」

「まあ、そうだ。僕もそこまで拘ることもないという意見に賛成です」

ここで逆田が言葉を挟む。

「おっしゃるとおりです。しかし、キチツと撮影しなければならぬときがあります。しかも連続的に。話を元に戻しましょう。さて半透明ミラーのメリットは分かっていただけだと思いますが、デメリットをまとめましょう」

「すぐさま田中が応える。

「光が二分されて光量が半分に落ちる。つまり暗くなるということです。でも露光、要はシャッタースピードを落として光量を二倍取り込めばいい」

「シャッタースピードを落とすとぶれるぞ」

「両大家が声を揃える。

「ぶれを補正するか感度を上げればいい」

「そのとおりです」

「逆田が田中に賛辞の声を向けると珍しく山本が苛立つ。

「いったい何を言いたいのか、早く教えてください」

「我々報道関係者は動画用のカメラを使いますよね」

「山本が黙って頷く。

「実はあのカメラは人間が見たままの映像を撮影していません」

「今度は叫ぶ。

「えー？ どういうこと！」

「あつ、そうか」

田中ではなく意外と立派な服の大家が小ひぎを叩く。

「一眼レフカメラのない時代ではカメラでも映像撮影機でも……そうそう昔は8ミリと言ってたな……つまり昔はフィルムの時代だったから、撮影してもちゃんと映っているか、フィルムを現像しなければ分からなかったのじゃ」

立派な服の大家に触発されて質素な服の大家が発言する。

「レンズキャップを取るのを忘れて一所懸命撮影したのに現像したら真っ黒だったことがあったな」

「それはアホじゃ」

「アホ？ 何がアホだ」

質素な服の大家が立派な服の大家に詰めよる。

「ケンカは止めてください」

田中が割りこむ。

「こちらの大家さんが言いたいのは見たままを撮るのは難しいと言おうとしたんです。一眼レフでなくても今のカメラは撮像素子が撮影中の被写体をモニターに表示しますから、レンズキャップをつけたままならすぐ分かります」

そう言ってから田中が首を捻る。

「わざわざミラーで光の進行方向を分ける必要はない。撮像素子からの情報がモニターに映るんだから」

「そうです……」

逆田の言葉を遮断して田中が続ける。

「だからミラーレス一眼レフカメラが開発されたんだ。それなのにわざわざミラーをつけて、しかもそのミラーを半透明にしたカメラのことを議論している。なぜなんですか」

逆田が応える。

「それは撮像素子に映る被写体というのは人間が見た被写体と異なることがあるからです」

「もう、やめて」

ついに山本が悲鳴を上げる。田中はそんな山本を慰めながら逆田に解説を求める。

「それは撮像素子に致命的な欠点があるからです。人間が見たらこう見えるだろうという想像で撮像素子は記録します。その記録データをモニターにも流します。赤い花が黄色い花として記録されることもあるのです」

「そんな！」

田中の驚きに質素な服の大家がパチンと両手を打つ。

「その昔、フジフィルムとサクラフィルムというメーカーがあった。晴天の日、フジフィルムで撮影すると青空がそれこそ青々と映る。ところがサクラフィルムで撮ると花曇りのような空

になる。今度はサクラフィルムで子供を撮ると肌が透きとおったような淡いピンク色で生き生きとした写真が撮れる。フジフィルムで撮ると青白い元気がない子供の写真になる」

「どちらも人間の見た目とは違うのじゃ」

「お前は黙っとれ！」

「アナログのフィルムでもデジタルの撮像素子でも見たまま記録できないんだ」

田中が納得すると山本が叫ぶ。

「逆田さん！ 結論を言って！ 私にはさっぱり分からないわ」

「こう言えばどうですか。いずれにしてもカメラでは真実は撮れないと」

「えー！ だったら私たち報道関係者はウソを撮影して報道してきたんですか」

「極端すぎますが、場合によってはそうだった」

「それは事実を撮影した画像や映像を切り取って編集したのが原因ではないのですか」

「もちろん、時の政府の圧力に屈してそのような映像を流した報道機関もあった」

「否定しません。でも、今やこのテレビのように真実そのものを伝えることができるようになりました」

「でも、誰がどのような機器で撮影しているのか、山本さん、知ってますか」

「それは……」

「結局は人間が撮るのです。誰でも構いません。責任感を持って報道のモラルを守る人なら。」



見たまま映す道具が必要です。軽量小型でこのテレビに直接転送できるカメラが必要なのです」  
 誰もが沈黙する。

「これを見てください」

テレビの中で逆田の掌に直径一センチほどの黒い玉が見える。余程その玉が重いのか沈んで上半分しか見えない。

「トリプル・テンと呼ばれる世にも不思議な物質です。スミスさんから借りました」

金属のような光沢を放っているがゴムのようにも見える。重さに耐えきれず逆田の掌から床に落ちるとタイルカーペットが割れるが、ボールのように跳ねあがって逆田の掌に戻る。何とかがつむとガラス板に塗りつけるように広げる。ガラスは真っ黒になるが、そのガラスをカメラに向けると完全に透けて見える。しかし、すぐ黒くなる。そして透明になる。

「このトリプル・テンの比重は金の十倍です。つまり金の10倍重いのです。硬度、つまり硬さはダイヤモンドの10倍です。そして硬いのに流動性比重が一〇で水のような滑らかさを持っています。これらの特性を持ったトリプル・テンをミラーアリアー眼レフカメラのミラーに塗布すれば透明ミラーになって理想のカメラができます。つまり減光することなく光を二分します」

「重いカメラになるんじゃない？」

逆田はその見解に頷く。

## 第三十八章 半透過ミラー